

養。

昭和二十年一月 新設部隊に編入。現地召集の開拓団召集兵、朝鮮人召集兵の教育係上等兵として勤務す。

昭和二十年四月、師団命令にて満州防衛主力を南に移動した後、陣地構築作業に勤務。

同年八月九日、ソ軍は国境突破、攻撃進入す。

第八十八部隊は師団命令にて東京城山中の本隊に合流。連隊砲の砲弾は一門につき八個しか与えられず。

山中に待機中八月十六日、終戦を知らされる。

武装解除の命令が下達され、兵器を中隊ごとにまとめ、ソ連軍の監視付きのうち、に牡丹江掖河の兵舎に集結。

ソ連軍の接収管理下に抑留され、九月下旬、シベリア・タイセツト収容所に収容

される。集成作業大隊名忘却。大隊長名忘却。

昭和二十三年五月中旬、舞鶴復員。引揚船名忘却。

後、家業である鮮魚販売業（通称魚屋）を営み続け、数年前より学校給食を引き受け、弁当仕出店として営業を続けている。

（北海道 渡邊 建一）

## シベリア抑留記

北海道 菊池 普薫

### 一、出生から入隊

大正十二（一九二三）年一月二十八日生まれ。

北海道松山郡厚沢部町木間内、遠成寺（東本願寺所屬）の農村地帯における小部落である。

京都大谷中学校（五カ年）を卒業する（昭和十六（一九四一）年三月）。約二カ年間、僧侶とし

て修業をする。父母、自分を長男として弟妹八人、十一人の家族構成であった。

昭和十七年十月から約五十日間、東本願寺奉仕団の一人として、三菱大夕張炭鉱へ。一日も休まざ奉仕する。昭和十八年一月、旭川へ第一乙種歩兵として徴兵。旭川部隊で五十日間訓練を受け、三月、満州西東安八十八部隊へ入隊する（雨宮大佐 部隊長、雨宮翼中將 師団長、連隊長 田中弘憲大佐）。

幹部候補生（甲幹）となり、昭和十九年八月、軍の総動員令により九州熊本にて待機する。関東軍司令部の命令により甲幹の者のみ満州延吉へ転属。教育隊の指令により約二カ月間、宝東、虎林、虎頭と転々としながら訓練を受け、昭和二十年四月、見習士官に昇進する。

※（八十八部隊、沖繩にて全滅の悲報、帰国してから知る）

当時の教育隊長は荒木大将の子息、荒木少佐である（延吉予備士官学校戦術教官）。

## 二、ソ連軍侵攻前

見習士官になってからは五叉溝、錫陽鎮、磐石と転属し、最後は奉天（瀋陽）を「腹切り場所」として撫順にて新設部隊を増設し、爪、髪の毛、写真等を用意し決戦に備える。撫順駅で、天皇陛下の終戦詔勅をラジオにて放送され、涙を流して残念がる……。

間もなくソ連軍が侵攻して武装解除となる。ただし、将校は軍刀帯持を許さる。

## 三、終戦

前記の通り、抑留になって撫順から奉天まで歩かされ、郊外の新屯公園にて暮舎生活をする。奉天市街に入って驚いたことは、日本の商店という商店は窓ガラスが粉々になり、畳は剝がされ、荒れ放題の状況。のみならず、さらに年齢のいかんを問わず、女性は男の服装をして性の予防を計りたる者多数なり。また、満人の略奪をソ連軍は暴動と見違えて、一分間六十発のマンドリン（自動

小銃)にて死骸の山を築いた悲惨なる状態でもあった。

ソ連占領下におけるソ連軍、現地人の動静。

奉天郊外にある新屯公園の暮舎生活でのことです。あるとき、私共所属の部隊へ三十歳代以上の年配層達が続々編入され、事情を聞くと、何と奉天在留の人達である。「奉天広場に朝九時集合せよ! 帰国に先立って調査を行う」との通告を受け、誰一人疑わず集合したのが運の尽き、満軍、ソ連軍に包囲され、強制的に連行され編入されたとのことである。

また、関東軍衣類倉庫の衣類撤収のため十人ほど引率して、ソ連軍のトラックに乗車して作業を行ったときである。大型トラックに軍の衣類を満載し休憩中、幸い十五、六歳の若い歩哨がないので何気なく検問所の机の引き出しを開けると、チャンチュー(支那酒)をはじめゆで卵が沢山あるではないか! 「食べるべし、飲むべし」でたちまち平らげて休んでいた。そこへ例の若い歩哨

が来てこれから楽しもうと机を開けたらないので大いに怒って、いきなりこちらへ自動小銃を向けたのである。自分とはつきに、「お前達はじっとしておれ! 何とかするから」と懐から満州紙幣を数枚出して振ったのです……。相手はマンドリンに手をかけている。一步一步近づいてお金を渡すと引き金から指を離したので、ヤレ助かったと、安心と同時にドツプリ冷や汗をかいた次第です。今撃たれるか、と一歩ずつ近づいていった境地は未だに忘れません。帰りには奉天市街で、ソ連の将校がタイヤと満人の時計と交換したりした。年配の女性が男性の姿をして、「若い女性が犯される、何とか助けて欲しい」と哀願されても、どうすることもできない我が身が情けなかつた。

#### 四、シベリア抑留地への旅

約三カ月間の抑留生活のうち、連日馬肉(サラ肉とも言う)の副食にはウンザリでもあり、ま

た可愛相でもあった。

十一月中旬頃と思うが、いよいよソ連領へ向かって出発となる。有蓋貨車上下二段にそれぞれ四十人近くの収容責任者としてのときである。出発間際に「坊さん、いないか」とのことなので、輪袈裟を掛け念珠を持つて読経した。

二、三人の方が亡くなり火葬しながらの嘆仏偈（十分内外）の葬式である。ソ連の将校も十字を切って冥福を祈念した。一貨車ごとに歩哨が貨車の屋上に座して警戒をしている。「もし輸送中に逃亡者があれば責任者を銃殺に処す」との警告にもかかわらず、窓から逃亡者が続出したのである。自分は上段に座をとり「決して逃亡するな！見つけ次第軍刀で殺す」と威嚇はしたものの、心底は穏やかならざるものがあつた。恐らくこの貨車は奉天から黒河に向かつているのではないか！翌日眼を覚ますと三人程、人員が足りない。夜中に他人からカンパン類を盗んで、あの小さな窓口からくぐり抜けて飛び下りたのであろう。機関手

は日本人で山へ入ると速度を落とす。逃亡する者は地理に詳しい開拓民であろう。走行中、逃亡者を撃つても当たらぬ率が多いのではないか。たとえ運良く逃げられても満人に見つかり、ソ連軍に通報するから、九分九厘は再び捕らえられてラールに舞い戻るのが多いと聞いている。

開拓者といつても、入植者が未開地だけを開墾したのでなく、朝鮮人や満人が現に耕作していた土地を強制的に安価に買い取り、そこへ開拓団を送り込んだケースが多い。日本植民地政策の失敗の一つは横暴を行なったことだ。

また運悪く、ある駅に停車する直前に逃亡して狙撃され死亡したのを目の当たりに見て悲しく思った。翌日も逃亡して何人かいない。ソ連上級部より「お前はソ連領に着いたら銃殺に処する」と警告され、「どうでも勝手にしろ」と開き直ったら、別に何とも思わなくなつた。

数日間貨車に揺られ漸く黒河の駅に着いたのが十一月頃にて、黒龍江より対岸であるソ連領ブラ

ゴエシチェンスクへと渡河する。既に厚い氷に覆われ、歩くに支障なくとも、戦車の渡河は無理であった。夜通し歩かされて、翌朝到達したのである。

さらにブラゴエ駅から貨車に揺られイルクーツクに向かつて、何日経過したのかも覚えていない。

## 五、抑留地の生活

イルクーツクに着いて混成部隊として三年六カ月間、抑留生活を送る。

最大の悩みはシラミである。直ちに収容所内のバーニヤで衣類を脱いで入浴する。蒸し風呂でシラミが落下し何寸も溜まり、真っ白になっていたのは今でも忘れない。入浴と言っても、与えられたのは大洗面器一杯だけの湯である。

いよいよ本格的伐採という強制労働が始まるのである。

約二十人位を引率して、二人一組の単位にて、

ピラー（二人引きノコギリ）、タポール（小さい金時マサカリ）を渡され、ノルマ制である。飯盒にはポーム（コーリヤンの粉三分の一）、黒パン一五〇グラムを支給され、歩哨と共に一キロないし二キロ近く歩いて現場の山へと入る。樹木の品質は北海道によく似ている。特に赤松の木が多く、シラカバ、ブナ、イタヤ等日本の山にきたような錯覚を覚える。倒木するにも相手がいないと仕事にならない。俺は遠慮して老齢の少尉と組んだが、初めての経験らしく、呼吸が合わず、最低のノルマに終わる日が多かった。しかも隣の血気盛りの作業隊と比較され、責任者として特別収監ラーゲルに三日間収容され、罰直として昼食は除かれた。本部付の副官〇〇中尉が薪の中に黒パンを差し入れてくれた。四畳半位のラーゲルのため部屋が狭く、小さな薪ストーブでは寒くて眠れず、夜通し焚きつけながら暖をとっていた。すぐそばに望楼があり、歩哨も寒さに耐えられず暖をとりややって来て、ロシア語で盛んに話しかけ

る。自分も日本語とロシア語（チャンポン）で話して退屈しない。ある程度の時間になると望楼に戻る。三日目に解任され作業に戻ったが、相変わらずシラミ取りに追われる。余りにもシラミが多く蔓延し、そのうち発疹チフスが流行して体力的、精神的にも衰弱して、毎日のように亡くなる人が続いた。主に亡くなる人は在満開拓関係で強制抑留者の方々である。無理もない。我々と違って家族を思い、精神的打撃に追い打ちをかける発疹チフスである。自分も僧侶としての関係上、亡くなられた方々数人を供養したことがある。最初は新しい襦袢、袴下、軍服を着用させ、階級も上げて読経した次第である。

連日零下三五度の酷寒であるから、嘆仏偈が葬式の読経であった。地面は地下深く凍結し、ツルハシなどは跳ね返ってしまう。ソ連の習慣は火葬せず、埋葬である。一人埋葬するために少しずつ火を燃やしながら掘り下げるが、それだけで一日じゅうかかる。ようやく埋葬できるだけの穴を掘

るのだが十分ではない。どこかでそれを見ていたロシア人が、食糧、衣類が欠乏している状態なので、夜中に死人の衣服を剥ぎ盗り裸にして、サーと浅く土をかけるだけなので、狼が来て埋葬者を食い荒らす。これではならじと裸にして荒ムシロに包んで読経、埋葬したものである。

## 六、労役

あるとき、司令部から派遣隊への募集があり、早速手を挙げて応募し、二十人程引率してミユウラ炭鉱に行く。希望者の中には奉天から強制抑留された民間人も若干含んでいた。本隊にいと、発疹チフス、熱病に侵される怖れから逃れるためである。炭鉱と言っても日本の近代式と違い、カントラの光で作業するから、どこまでもトンネル式である。幸い三菱炭鉱奉仕団の経験を生かして、先導役となつて作業に従事した。トロッコを引っ張るのは道産子系の馬二頭である。ある夜の作業中、若い歩哨がブランドーに酔つて拳銃を空

に発射した。それは危険とのことで注意すると、銃を突きつけて身体検査をする。困っていると監督と数人の兵が来て連行したので、安心して作業に従事できた。またあるとき、ドイツの女が一人捕虜になったとかで、私のところで手伝い、身振り、手振りで話し合ったのは印象的であった。

本隊からの情報で、きのうは二人、今日は三人と亡くなっていくというニュースを聞き、無常遷流の厳しさをつくづく感じた。

また次の年、昭和二十二年冬の頃、イルクーツク市内のある製材工場に二十人位引率して派遣されたことがある。山から搬出された丸太は長さ七〜八尺位あって、池の中に浮かんでいる。それを引き揚げベルトコンベアーによつてトロツコに積むと、数秒足らずで結氷に変貌した。ドイツ式縦ノコの刃は五本並んで、太い用材を一回に縦引きに引いてしまう能力を有している。

〔抑留中の生活と極限状態における意識〕

少しでも見当が狂うと刃がバラバラに折れて樹

木に食い込むので、作業も休みがちになる。何しろ火力発電によつてタービンが動くので、零下五〇度になると、いくら火孔へ木屑や樹皮を投入しても、継ぎ目である途中のパイプが冷凍されてしまうからである。自分は少しでも暖かなら好条件と思つて一輪車にての運搬役を選んだのであるが、休む暇もなく火孔へ投入せねばならず、後悔先に立たずであった。

年二、三回、零下五〇度以上になることがあつた。そうなると作業どころか、凍傷予防に必死であつた。眉毛は白くなり、吐く息のため防寒帽の周囲は真つ白に凍りつく。特に鼻の先が白く凍るのは気づかないので、お互い知らせ合つて、雪を掴んで擦ると元のようになるが、手だけはビリビリと痛くなると指先は真つ白く凍傷を患つていゝ。感覚はない。一生懸命両手で揉みほぐすより手段はない。そのうち徐々に赤味を帯び、元の状態になつたときは火傷したような痛みがある。当然そんなときは作業休みで、暖をとつて難を防

ぐ。中には内地出身の人で、凍傷を患った手足をペーチカで暖めたら手足の指が溶けてしまった。そういう災難を見て、つくづく事前の予防がいかに大切かを知った。

またあるとき、レンガ工場の使役に誰よりも早く手を挙げたら、たちまち十五人の賛意を得て、これを引率、作業に従事した。我々は大型のダンブにレンガを集積し一休みしていた。ふと向こうを見ると、ドイツ兵の捕虜約三十人位も同じようにレンガ集積の作業をしていた。しかも三人に一人ずつ銃剣付きの監視ではないか！ 彼らは実際に戦闘して捕虜となったが、我々は詔勅のもとで抑留となった。それは雲泥の差と言っても過言ではないと思う。

またあるとき、十人程引率して水道布設の作業に従事したことがある。イルクーツクからトラツクで二、三時間離れた地区である。小犬が自分のところから離れない。まわりつくだ可愛くなり、パンをやると喜んで食している。十日ほど小

犬と一緒に過ごし、作業も終わってダンブに乗車して帰る途中、「小隊長殿、この肉を食して下さい、美味しいですよ」と言われたので食べた。「美味しい、これは何の肉だね」と言っても皆顔を見合わせて笑っている。二度、三度尋ねると、「可愛がっていた小犬の肉ですよ」と言われた。怒るに怒れず苦笑したことを思い出す。後にも先にも初めて犬の肉を賞味したことになる。

再び本隊に戻って伐採作業に従事したが、重労働であるから空腹を感じる。九月でもシベリアは寒い。

## 七、抑留者の統制管理

歩哨のいないとき、住宅街の側にある芋畑を竹の棒で掘り返すと、一つか二つ芋が出てくる。何回か繰り返すと飯盒にいっぱいになる。自分の村にもある蕪アヤマを岩塩とともに煮出して空腹を凌いだ。寒いから焚き火をしながら昼食をしていると、我々のために水汲み作業をしていた老齢の口



シア人が、袋の中から二、三個芋を焚き火に入れて火床<sup>ほど</sup>焼きし食べていた。「ヤポンスキー、黒パンハラシヨ。俺は黒パン買うにも配給のため手に入らず、芋が食事代わりだ。若い頃、日露戦争のとき日本兵の捕虜になったが、待遇は良かった。その恩返しをしてやる」と語りかけてきた。本当に稀なる人に遇うも、因縁の深さを感じた。

あるとき、市内のマガジンで黒パンの自由販売があった。朝早くから多くの行列で、店の前には二人の警備員がいたが、行列の中ごろで売り切れとなると、ワアと大勢の人が押し寄せて来た。慌てた警備員が空に向かって拳銃を発射すると静まり返った。それを見て、何とも言われぬ思いがした。ソ連の兵隊に三日分のパンを配給するとその場で食してしまうとのこと。あと三日間、何を食して過ごすのであろうか？ 我々としては想像できないことである。

自分もアミーバ赤痢にかかって入院した。十二月頃と思うが、仮の病院に三週間入院したときの

ことである。暖房の代わりにレンガを焼いて毛布で包んだはよいが、毛布が焼けて危うく火傷を負うところであった。

駅が近いのであろうか、夜中に木材運搬のため貨車が入ってくると、夜明け近くまで「ヨイトマケ、コラシヨ、ヨイトマケ、コラシヨ」の掛け声が耳に入ってくる。その掛け声は、地獄の底からほとばしる悲痛なる叫び声と言っても過言ではない。

イルクーツク収容期間中、共産主義の教育が二、三週間に一度はあった。混成部隊であることが幸いしたかもしれぬが、アクチブの指導者は頭の毛が白い大学教授風で、声が低く聞こえず、何をしゃべっているか分からず、大して関心も示さなかった。たまたまハバロフスク方面から新聞が配付されたが、内容は、日本の国はアメリカの植民地化となり、食するものもなく餓死者累々の悲惨さだと何回も繰り返し記載している。自分はそれを信じなかった。

過酷な労働ばかりではなく、軽労働のときもあつた。トマト選別の使役である。熟したトマトを選別しながら、ビヤ樽に塩をまぶして貯蔵する。美味しそうなトマトを腹いっぱい食べながら働いたことがある。すぐ横でマダム達が一列に並んで、キャベツを細かく刻んで塩でまぶしてビヤ樽に入れる。日本のナマスを食べるが如きである。

秋には郊外の山林地帯で茸採りの作業に従事したことがある。日本の茸は必ず月見草と言う毒茸があるがソ連にはなく、遠くから見れば赤青黄白等色とりどりの美しい色彩が見事である。一時間もかからぬうちに大きなカント袋にいっぱいになる。誰かが民家の前に山牛蒡ヤマゴボウがあるので掘っていると、「それを食せば死んでしまう」と言つて驚いて見ている。「我々は日常これを食している」と言つて試しに塩と油で味付けして食させると、「これは美味しい、香ばしい匂いがする」と言つて、我も我もと掘つて食した。

ソ連兵は、俗称マホルカと言つて、新聞紙に粉を入れて喫煙する。我々は「タバコ、マホルカ」と言つて一握り程マホルカの粉をもらつて吸つたものだが、唾液は薄くなかなか粘らず、ソ連兵のようにうまくゆかない。また、ヒマワリの種をよくもらつて食べたものである。口中へポーンと一粒入れ、殻を割り出して食したが、誠に香ばしく退屈しなかつた。

追々と作業も楽になり、歩哨はブラブラどこかへ出掛け一時間以上も姿を見せぬので、適当に休んでは作業に従事した。

## 八、帰還

昭和二十三年を迎え、「いよいよヤポンスキー、ダモイだ」の声をあつちこつちで聞く。イルクーツク郊外でダモイに備えて天幕生活をしていたとき、別に作業もなく暖かい日が続く。ハバロフスクから配送された新聞に、連日のように日本国の悲惨なニュースが載つたが、果たして事実かどうか

か疑わしい。

共産党員集団の幕舎からマルクス・レーニン主義の基礎的問題の本を借りて研修する。少し離れたところに共産党関係のグループが幕舎生活をしていたので、この新聞の記事は果たして事実であるか否かを尋ねたら、「このようなことは決してない、デマ八分の新聞である故安心せよ」と言われて安堵の念を感じる。

日本へ帰る途中、イルクーツク郊外の墓地に亡くなった方々の墓標が続々建立されていた。二十幾つ位まで数えているうちにそこから離れねばならず、感無量の思いで去る。

貨車に数日間乗せられ、漸くナホトカの手前、ハバロフスクに着いたときのこと。各ラーゲル地区から集結された数百人の人達で溢れている。一方で、アクチブを中心に、天皇制、ブルジョアジー打倒で氣勢を上げ、共感を示す黒山の人達。

他方では、音楽隊を中心に集まって興味を示す多数の人々。そのグループと交わっていたためにテ

ストをされたのである。

ナホトカに着いたが何日たっても乗船の気配がない。後続部隊は続々集結して舞鶴へと引き揚げていく。夜は南京虫に攻められ、痒くて痒くてどうにもならない。昼は柱の穴に潜み、夜な夜な現れる。忍者と同じである。一週間以上も過ごしたであろうか、「お前たちのラーゲルは半年再教育せねば日本へは帰れぬ」とのこと、ウラジオの郊外、ウオロシーフで毎日赤旗を掲げ、天皇制打倒、ブルジョアジー打倒を叫んで、半年軽作業に従事しながら、焦る気持ちを抑えて帰国を待ち望んでいた。

九月上旬頃、何とか認められていよいよナホトカから舞鶴へ引き揚げることになる。一日かかって舞鶴に到着する。身体検査を受け、入浴し、二日間滞在してそれぞれ故郷に帰るのであるが、我々の部隊は三日間滞在了した。

途中、上野駅に停車したので、駅周辺に出て見ると、何と空爆のため一面焼け野原にて、トタン

で覆ったバラック建てがあつちこつちに点在している。だんだんと北海道へ近づくに従つて空爆の惨状が見当たらない。誠に平穩無事である。青森から連絡船にて四時間半乗船して函館に着いたら、父母達が迎えに来ていた。函館は昔のままの賑やかさで、とうてい敗戦国とは考えられない。我が故郷に戻つたのは約五年六カ月ぶりである。その間、音信不通で、九分九厘再び戻つて来るとは思わなかつたらしい。ただただ感無量、季節は十月初旬であつた。

## 九、帰国後の生活

私は宿世の因縁により寺に生まれたのであるが、約三年六カ月の抑留との因果関係により僧侶としての気持ちが起こらず、何かしらボーとして一日を過ごした時間が多かったと思う。帰国してまず第一番に印象づけられたことが三つある。

(一) 木間内の村に電気がついたこと(昭和二十一年頃)。それまではランプないしガス

灯。

(二) 妹が当部落に嫁いだこと(寺関係は寺から寺への慣習婚姻関係である)。

(三) 弟が一人生まれ(昭和二十年)。現在、東京警視庁警部補。

冬季節間における一カ年間は、いかに寒気強くとも寒いとは思わず、三年目に漸く僧侶としての自覚を持つ。

昭和三十一年八月、父逝去、自来約四十三カ年間、住職としての職務に邁進する。

平成十五(二〇〇三)年に八十歳にならんとしている、現在せがれに譲渡し、二五〇ccのバイクで走行し法務に専念し(四里四方内)、老人クラブの会長として悠々自適の生活を送っている。三十歳代頃から部落会長を三十二年間、民生委員、選管委員等を兼職して今日に至る。

恩給に関して

海部内閣の時代、松山支庁へ恩給について二回

程申請したがいずれも却下され、不審に思い、内容の明るい人に調べてもらったら、兵隊で一年、将校では二年不足とのことでした。次第です。平成四年、一時金として十万円と桐の御紋の銀盃を贈与されました。

#### 慰霊碑参拜

平成七年七月上旬頃、北海道管轄地区でも約三千五百人の方々がシベリア抑留地で亡くなられ、慰霊碑が札幌、真駒内に建立され、函館地区支部長矢島さん（平成十四年逝去）の御世話によって除幕式に参列させていただきました、無上の感激を覚えしました。その後、毎年八月二十日、盆に関係者の方々が参詣せられるとありますが、私も法務の関係で参詣できないこともあります。今後、健康である限りできるだけ参列したく思います。

#### イルクーツク墓参りに関連して

平成十二年八月二十五日より九月一日まで、約八日間の日程にて五十数年ぶりにてイルクーツクを中心に郊外周辺の墓地に読経供養をいたしました。

た。

矢島支部長さんの勧誘もあり、また平日頃、生きている間に一度だけでもよい、墓参読経してみたいとの思いも、心のどこかになきにしてもあらずであつたと思います。

午後一時、新潟空港三階ロビーにて結団式を行い、入国手続きをして、所要時間約四時間三十分でイルクーツクに到着しました。当日は台風の暴風圏が通過した後でありました。団長さんは広島県の方で秋山保綱さんである。新井通訳（女性）を入れて十四人、他に六班編成の方々は、チタハバロフスクウラジオストックと分かれての墓参だと思えます。

八月二十六日午前八時四十分、中型バスで出発、約一時間三十分にてイルクーツク郊外の墓地に詣る。各人埋葬の墓地には正方形的コンクリートで固め、ロシア式の文字で名前を刻んである。どのくらいの数か不明ではあるが、一千以上のことである。

八月二十七日、チェレンホーボ（バス所要時間三時間三十分）の墓参。イルクーツクの墓参。両地区とも五百人以上の埋葬、土盛式。

イルクーツク墓地、チェレンホーボの墓地に輪袈裟を掛け嘆仏偈を読経する。読経後、団長さんは表白文を読まれる。日の丸の旗を掲げて果物を供え、合掌する。チェレンホーボの墓参のとき、札幌支部の上館さん曰く「この場所へ亡くなった戦友を背負ってきて埋葬した。しかも労役は厳しく、寒さと飢えのため鉄道敷設レール一本につき一人の割合で死亡したところである」と。イルクーツク伐採作業以上の過酷労働と痛感する。

八月二十八日、イルクーツクよりタイシエツトへ。列車で約十二時間かかる。翌朝到着。タイシエツト地区第七病院の跡の墓地へと向かう。

イルクーツク周辺墓参に関連して

台風の上陸した後の影響で連日のように雨が降っている。バスは目的地まで行けず、泥だらけになって歩いて目的地の墓地へ着く。立派な墓標

があつて「我等は此処に眠るなり」と記されている。花と果物を供え、ローソク、線香を灯して読経する。団長さん、大きな声で表白文を読まれる。少し雨がやむと蚊が出て、通訳さんにスプレーをかけてもらいながら読経する。すぐ横にロシア人の墓地あり。周辺は樹々の間に土盛りの墓が無数にある。イルクーツクの都会と違って、道路整備の不完全さに驚かされる。ホテルと違って一歩外に出ると困惑したのはWCである。男性は野外にて小用するが、女性は困ったことと思う。

食堂の側にWCと言っても名ばかりの粗末な建物があり、板に小用、大便をするだけの簡単な穴をあけたものである。日本流で言えば、大正から昭和初期の時代のトイレである。文化の程度は日本と五十年の開きがあると係の人が言っていたが、乞食も多く、郊外に行けば行くほど文化の設備が少なくなる感じがする。旅費は他の海外旅行よりも多額ではあったが、日頃のソ連墓参への意識が現実となって実現されたことに、仏縁の深さを尊

く感じざるを得なかった。

【執筆者の紹介】

住所 北海道松山郡厚沢部町旭丘

出生 同右において、東本願寺派遠成寺住職、

父・登の長男として大正十二年一月二十八日出生す

軍歴

弟妹五人。長女 石若ウメ、三男 菊池泰陽、二女 矢野壽子、三女 工藤正子、五男 菊池建治  
妻死亡

学歴 昭和十年三月、厚沢部町立鶉尋常高等小

学校卒業

昭和十一年三月、京都府京都大谷中学校

入学

同 十六年三月、同校卒業

職歴 昭和十六年四月より京都大谷派寺院にて

二年間、僧侶として修業。兵役を経て復員後、郷里遠成寺にて僧職を勤める

昭和三十一年八月、先代住職（父）逝去

につき、同年十月、住職拜命

平成十年六月、長男真一へ譲渡

家族 父死亡、母死亡

昭和十八年一月、第一補充兵役。在満要員として旭川第七師団北部第二部隊に入隊

同二月、満州牡丹江省西東安駐屯、第十八部隊（軍旗 四国松山二十二連隊）

に編入

師団長 雨宮翼中將、連隊長 田中広憲

大佐

満州防衛

昭和十九年七月、南方戦線に動員令下り、山下兵団ヤマ三四七四部隊となって朝鮮経由、九州熊本に一時駐留

同年九月、幹部候補生として満州宝東第

九百三十六部隊（軍旗 四国丸亀歩十二

連隊）教育隊に入隊

昭和二十年一月、満州延吉予備士官学校に入校

同年六月、同校卒業。兵科見習士官となつて興安嶺五叉溝の師団司令部に赴任  
同年八月、終戦。武装解除。シベリアに強制抑留

その他  
長男に任職を譲つてからは、寺の多忙時は長男を手伝つて僧職を勤め、村の老人クラブの会長として会のお世話に余生の生きがいを感じて、その半生を処している。

(北海道 渡邊 建一)

## 遙か青春 シベリア

岩手県 鈴木良男

はじめに

昭和二十(一九四五)年八月九日未明、ソ連軍

は全ソ満国境の監視哨に対し一斉に砲撃を開始した。強力な空軍に援護されたソ連機動部隊は、何の抵抗も受けることなく国境を突破したのである。

すでに雪解けの頃から、ソ満国境には暗雲が立ち込めていた。独ソ戦終結と前後して、ソ連軍は極東への大移動をしつつあることは確認されていたが、かつて不滅を誇つた関東軍はもはや見る影もなく、第九十連隊からも三個中隊が本土決戦に備えて、この年の二月二十日、対馬の濟州島に完全武装で転出するなど、国境守備部隊は、教育係要員、特技兵を除きほとんどが転属となつて、監視哨勤務や衛兵要員にさえ事欠く現状であつた。

八月九日午前八時三十分、前日、朝鮮から入隊したばかりの初年兵千五百人を連隊本部前に集めて、兵器・被服を支給していた最中であつた。突然、背後の山頂から三機のソ連機が急襲、アルシャン駅の軍施設に爆弾を投下し、機銃攻撃を繰り返して西方へ去つた。